

## 【計画のあり方、構成について】

- ・ 「10年後の目標を立て、それを実現するためにどうするか」「まずあるべき子ども像や教師像を描いて、そこに向かうためにどうするか」といったバックキャスト的、逆算的に考えていくのではなく、子どもたちの願いといったものを基本にしながら、例えば『孤立をしていることを放置することはいけないことである』『一人も取り残さず、全員が参加できるような街、全ての子どもたちが社会に参加し主役になれるような社会にしていくべき』といった、社会的な価値として外してはいけないことをまず考えていきたい。
- ・ まず目標を立ててPDCAで回していくという手法は、経済が安定しているときには効率的ではなかったが、今のような変革期にはそれにこだわっていると全く何も出来なくなると言われている。数字に縛られて無理をしたり、またそれを達成しなかった場合には評価が下がるので次の計画を立てる際により小さな計画になってしまったりということが起こる。むしろ、今は、AARという、漸進的な、何年か先の目標を目指すのではなく今ある状況を少しでも良くするために皆で案を出し合いながら少しずつ前に進めていくという考え方が適しているのではないかな。
- ・ 目標を立ててそれを実現しようとする、それがノルマになり、プレッシャーになる。これまでの考え方を換え、「達成しなくてはならない」ではなく、子どもの願いを叶えようとするという方向性で行くことは非常に大事だと感じた。その方向性に立って、共生、格差、教師や関係者の負担、生徒たちの自己肯定感の低さといった課題の解決を検討していきたい。
- ・ 目標を決めてそれに向かって、ということではなく、10年間はまずこういうふうに行きましようよ、という書き方になるのかなと思っている。行政側の方々には厳しい話になるかもしれないし、議会でもあれこれ言われるかもしれないが、こうした話をするのは、10年後どうなっているか全く分からないからで、今回のコロナもそうだが、今後人工知能がどう発達するか分からない。一步一步確かめながら次にいく、という手法をとっていく必要があるのではないかな。
- ・ 行政的に説明ができるような設定方法はよく分からないが、スモールステップを踏んでいくという形になるのではないかな。
- ・ 従来の作り方をしないということになればやはり新しい枠組みを考えなくてはいけない。今回の新しいビジョンに関しては、こういう形で、ということを皆さんからもご意見をいただいてまとめていければと思う。
- ・ これまでの「あるべき姿」は「ありたい姿」になるのではないかな。「ありたい姿」を考える時には、今あるリソースを抑えないと、次の一步が策定できないと思う。杉並の教育が持っているリソースはいくつもあると思うが、学校教育、社会教育、地域一般のそれぞれの部分で分けて考えていきたいと思った。
- ・ 新たな教育ビジョンの構成は、まず、多様性の尊重、インクルージョン、共生社会などといった「教育行政が尊重すべき価値」というものがまず先に書かれるのではないかな。その次には、目指す人間像ではなくて、例えば杉並区立学校が果たすべきミッション、杉並区の生涯教育が果たすべきミッションなど、「ミッション」の話になるのではないかな。さらにその下に、そのミッションを実現するためのプロセスとして施策の方向性が入るのではないかな。
- ・ 今までは「現状の把握」があって、次に「こうすべき」ということが示され、次に「あるべき子ども像」が示されて、さらにそれに向けて施策をどう組むかというまとめ方になっていたが、今

回はそのようにはしない、という議論になっている。まず、「一人も取り残さない」「インクルーシブ」「孤立をさせない」といった行政が遵守すべき価値を置き、その「価値」を受けながら区立学校、区の生涯学習、社会教育が、展開されるべきミッションが書かれていく。そしてそのミッションを実施するために、こういう施策が書かれていくということになるか。

### 【子どもたちのために何をすべきか ～子どもの意見や願いの実現、子どもの権利条約 他】

- ・ 子どもたちの願いを叶えるため、私たちはどういう教育をしていくか、どういう教育条件を整えていくかということを考える必要がある。
- ・ 子どもたちのいろいろな思いが実現出来るようにどうしたらよいか、この計画の中できっちり書き込めたら良い。子どもの権利条約の考え方は学校現場に入っていない。この際、学校現場にきちんと入れていくことは最低限の出発地点ではないか。
- ・ 意見表明権というのはそれを受け止める大人がいることが条件になる。聞き取る大人側の仕組みをどう作るかが非常に重要である。
- ・ 子ども自身が弱者でもある。子どもの権利条約の様々な規定が日本社会ではなかなか入っていない。もう少し大人が子どもたちの声を聴いていかなくてはいけない。
- ・ いろいろな経験をさせ、それを見守る大人たちがいるという安心感を子どもたちに与えることで、子どもたちが伸び伸びと、夢を広げていくことができるのではないか。
- ・ レイチェル・カーソンは、子どもたちの「センス・オブ・ワンダー」を育てるのは共感的な他者、一緒になって驚いてくれる他者が必要だと言っている。他者としての地域の大人たちがどうあるべきかという議論にもつながる。
- ・ 福祉の立場から見ると、アンケートに答えられないような子どもたちがいるのではないか。一人も取り残さないという意味では、アンケートに参加できなかった声なき声をどう拾っていくかということも必要になってきているのではないか。
- ・ これまでは「education for all (みんなのための教育)」と言ってきたが、これからはある意味「education by all (みんなと一緒にやる教育)」になる必要があるのではないか。そういう関係を作ることが、子どもたちが主役になれるし、位置づけをもてるようになるのかもしれない。

### 【子どもや学校への、地域や大人の関わりについて】

- ・ 学校と地域が両輪となって子供を育てていくという大きな方向性が国から示されているので、行政に頼ってだけでなく、地域の大人たちが子どもや学校にどう関わっていくべきか議論したい。
- ・ 前回、「センス・オブ・ワンダー」という言葉が出たが、好奇心を育てるとするのは非常に難しい状況にある。好奇心の芽を育てていくことは大変重要。目標や夢を見つける手助けを家庭や教育の場でやって行くことが大切と思う。それには、いろいろな経験をさせることが重要で、学校に地域やいろいろな職種の人に来てもらって話をしてもらおうとか、様々な人と触れあうなどして、興味を持ったりとか好奇心を持ってワクワクしてもらえたりするようになれば、学校を楽しいと思ってもらえるのでは。
- ・ 地域にたくさん大人はいても、地域とつながっていない大人は多数いる。そうした人達をどう巻

き込むか考えられれば。

- 大人をいかに巻き込むか、大人のネットワークをしっかりと作ることが子どもたちの安定にもつながり、地域が盛んになっていくことにつながる。学校の立場で言うと、今PTAの活動が非常に衰退しているので、保育園、幼稚園、小学校、中学校といったところでの大人たちの活動を活発化させていくことによって、地域の子どもたちのためにできることも増えてくると思う。
- 保護者や地域が学校を頼りすぎる面が大きい。教員のリソースがそこにかかり割かれている。
- なぜ学ぶのか、それは幸せになるためで、「学校は幸せになるために準備の場」という表現が、誰にでも分かりやすいのではないか。人生100年時代、幸せに暮らしていくために学び続ける力が必要で、その原動力になるのが不思議に思う気持ちだったり、ワクワクする気持ちだったりする。楽しい気持ちで学んでいけるような学校をつくっていく必要があり、そこを地域が支えていくことが必要。地域の人とのふれあい中で学びの機会を作っていくことが重要。
- 学校の先生も含めて大人が、学び続けると楽しいということ子どもたちにどれだけ背中ですべてしているのか。先生自身が成長していくことにもっとどん欲になることで、子どもたちに学びの楽しさを見せられるのではないか。そのことを、親や地域の大人たちも見せられるような機会が、杉並の中で作られていくことが大事ではないか。
- 済美養護学校は地域が区内全域になる。そこにはいろんな人材が集まっていて、卒業生の保護者などで福祉分野に関わっている人は非常に多い。そんな人たちを杉並区ではどう捉えているか。自分が住んでいるところだけが地域ではない。また、済美養護学校には一日も早くCSになってもらいたい。
- 子どもたちが「あれをやりたい」と言ったときに「一緒にやろうよ」と言ってくれる大人が出てくるかどうか。大人が「でもね」と言ってしまうと子どもは発言しなくなる。「だったらこれやろうよ」といったら「自分はこれをやりたい」と言うのではないか、そういうことがAARの瞬間でもあるので、そうしたことが社会にうまく実装できるかどうか。
- 興味を持ったことを探求できるという面白さをもっと子どもに味わわせたい。その時に地域がどう活用出来るか。学校における授業と、地域をどう連動させていけるか。もちろん今でもやっていると思うが、もっと開発して行って、授業研究もして、地域の協力を得ながら、プロジェクト学習が深まるような、内容的な革新が大事なのではないか。

### 【虐待、不登校等への地域や大人の理解について】

- 虐待をする親も、大変厳しい中で育ってきており、責めるだけではその家庭も救われない。無知は差別・偏見を生むし、差別・偏見は憎しみを生む。虐待する親、不登校、非行には、そうせざるを得ない背景があり、その背景を地域が理解できるようにしていくことが我々の役割として必要ではないか。
- 不登校の子どもたちが抱えている問題は多く、社会からも排除されている。子どもたちは、自分はこうしたいといった思いは強くもっている。子どもたちが自発的に発言したことを制度や規則で制限せずに受け入れてあげられるとよい。
- 自分の話をちゃんと聞いてもらえるということ。そこが出発だろうと思う。例えば私も関わった非行少年たちの例で、問題を起こして警察沙汰になって引き渡されたときに説教をされると多く

はまた問題を起こしてしまう。しかし、話せばわかってもらえるという経験を積んでいる子どもたちは、いったん崩れても更生の道に帰ってくるという。自分が社会に受け入れられていて居場所がちゃんとあること、「これでいいんだよ」と言ってくれる大人がいるということが大事なのではないか。

### 【子どもたちの地域での活動の場について】

- ・ これまでは地域が子どもたちのために一生懸命取り組んできたが、これからの10年は、子どもたちが地域に対して何か与えられる部分を徐々に増やせば良い。子どもたちが蓄積した知識を活かせる場所、それがコミュニティ・スクールであつたらよい。
- ・ CSが今後、子どもたちも活躍できる場になればということが出ていたが、私も強く思う。子どもたちが地域の中で自分たちはこういうことが出来た、という思いが、地域を愛してくれる気持ちに変わっていく。この審議会に参加して、そうした場を創設していきたい思いを強くした。

### 【子どもたちのアンケート回答について】

- ・ 学年が上がるにつれて視野が広がっていくということと、社会のために何かしたいという意思が出ている傾向が出ている。そういう意味では杉並の子どもたちは健全に育っていると言える。
- ・ 今回の子どもたちのアンケートを見て、子どもたちはいろいろなことを考えていることが分かる。彼らが言っていることを受け止めながらそれをどう現実のこととして作っていくかが問われている。
- ・ アンケート結果を見て、杉並の子どもたちは健全に育っていることをあらためて実感した。
- ・ アンケートの結果から、良くも悪くも子どもたちにとって教員の役割は非常に重要だと感じた。
- ・ 初めての試みで子どもたちにアンケートを取ったが、それに答えられる子、答えられない子がいて、答えられない子どもの意見がどうしてもこぼれてしまう。それについて我々がどれくらい想像力を働かせていけるかが問われていると思う。さらには答える必要を感じない子どもの意見も含めて、どう反映していけるか課題がある。
- ・ 他のアンケートでもそうだが、「学校が楽しい」という子どもは多いが、その理由として「友達に会うのが楽しい」とか「部活が楽しい」とか「遠足がうれしい」とか言うが「授業が楽しい」とはほとんど言ってくれない。教え方の問題もあると思うが、先生たちがそういう条件にないということもあるかもしれない。その意味で先生方が子どもと一緒に探求できる、対等で対話的な関係の中で、子どもたちの探求心を大事にしながら、新しいものに触れていく喜びを自分も感じ取ってうれしくなってくるという関係ができるかどうか、といったことが問われている。

### 【共生、インクルーシブについて】

- ・ 特別支援教育においても、理念と現実に深刻なギャップがある。合理的配慮がなされていないとか、通常学級で学びたいとの希望が受け入れられないとか、サポートがついたりつかなかつたりする場合があるとか。理念があっても、実践が追い付いてこなかったということもあろうかと思う。そういう意味において弱者の声が丁寧に掬い取られるような仕組みが整備される必要がある。

- ・ インクルーシブ教育は障害者だけでなく、経済的弱者やニューカマーの子どもたちのような様々な社会的弱者の包摂という意味でのインクルーシブ教育、ということが杉並区で共有されると良い。
- ・ 一人ひとりの違いを認めていく、自分らしく生きていく「自己実現」を目指していく、最終的には自分自身が生まれて生きて良かったと思えるようなことを保障していくという福祉の視点を教育でどう実現していけるか。
- ・ 共生社会を目指すということは生易しいことではなく、みんなで仲良しこよしになるということではない。権利と権利はどうしたってぶつかり合う。そこでどのように折り合いをつけるか。折り合いの付け方のスキルというのは学校でも地域でも教えることはできる。そのスキルについて私は「ファシリテーション」と言っているが、そのスキルも子どもに伝えたい。

#### (比較、評価について)

- ・ 誰も取り残さない、という意味で、評価するのではなく、子どもたちの頑張りを認めてあげられるような仕組みが学校の中で出来てくると良い。
- ・ 一人ひとり違うということを価値にしていく。今までは皆同じだから平等だ、としてきたがもうそうではないのでないか。子どもたち一人一人が違っているということを受け合っていく関係を作っていく。これまでの評価はある基準に照らして序列化していくものであったが、お互い違うことをたたえあう。そんなことが大事ではないか。
- ・ 学校教育に「評価」はつきものだが、あるべきは、「評価」でなく「フィードバック」なのでは。学校は「評価」という言葉が好きだが、そうした文化も変えていかなくていけないかなと思う。
- ・ 「評価」ではなく「フィードバック」、日々改善を続けるという中で、教員も成長し、子どもと教師が楽しさを共有していくということが必要ではないか。

#### 【現場当事者の思いや考えの把握について】

- ・ 教育の理想と現実の隔たりが大きいとあらためて感じている。その中で、現場の当事者がどう思っているのかを吸い上げることが非常に大事だと感じた。
- ・ アンケートに声を上げることが出来ない子ども、また声を上げる必要さえ感じていない子どももいる。上がってきていない意見がたくさんあると思う。そういうことを現場の先生方が一番ご存じではないか。教育の一方の主役である先生方はどう感じているのか。子どもたちがこんな学校にしたいといっているがどんな難しさがあるのか、ということも一方で押さえておきたい。

#### 【学校や教員の多忙化の解消について】

- ・ 学校はあまりにも多くのことを抱えている。計画の中で学校教育の範囲というのは明確にしておくべき。インクルーシブなり、子どもの権利を認めていくというのは非常に重要なことだが、それを許容する学校組織の環境づくりが今後必要になる。子どもの教育活動にかける時間、仕事をもっと大切にさせたい。その絞りこみをするのが重要ではないか。
- ・ 前回、「断捨離」の話も出た。先生が多忙であるということは皆認識している。また学校は福祉的なことも抱えているということも多分にある。そんな中で先生方が教育の専門職として子ども

に向き合っていくことに注力しにくくなっている。子どもたちの夢を実現していけるような、また子どもたちと一緒に探求していけるような存在として、先生方が学校の中で生き生きと活動できるような場所にしていける必要がある。

### 【主体的・対話的で深い学びについて】

- ・ 今の社会ではいろいろなことが功利的に考えられてしまっている。お互いが影響を受けあい高めあっていくことの楽しさや嬉しさが学校や社会の中で実現できないか。「主体的で対話的な深い学び」と言われるが、対話というのは権利がぶつかり合ってお互いにつぶしあうということではない。対話によってお互いの考えや意見を組み替えていく中で深い学びができるということを行っている。対話の関係をこの社会でどう作っていくかも問われているのではないか。
- ・ 対話というのはやはり対等の関係でしか成立しない。先生と子どもたちの対等な関係をどう作っていくか、意識していくか。地域の中では、そうした対等な関係の可能性もいくつかあるので、地域のそうしたリソースを掘り起こしていけるか

### 【アートの教育について】

- ・ アート志向で仕掛けてくる公民館の話聞いた。まず初めに食いつくのは子どもたち、次いで高齢者、最後に現役世代が寄ってくるという。社会教育の一番の悩みは子どもや若者が来ないということがあるが、その公民館は最初に子どもが寄ってくると。好奇心をくすぐるようなアートの仕掛けや、大人ががんじがらめになる制度にとらわれない子どもたちが動けるような仕掛けが何かあるのではないか
- ・ アートという言葉聞いて、イタリアのレッジョ・エミリアの教育を思い出した。『子どもは100の言葉を持っているが99は奪われている』として、子ども主体の教育を進めており、その中心にアートがある。町全体で子どもたちがアートのプロジェクトを進められるよう、町の中に材料を集める場所を作ったり、協力して学校を運営したりしており、子どもたちは町に出ながら自分が興味をもったテーマを掘り下げるといふ学習をしている。
- ・ アートを活用した教育は、探求して発見する面白さであったり、自分が変わっていく嬉しさであったりということにつながるのではないか。そのためにコミュニティ・スクールをどう活用していくか、アクティブ・ラーニングがどれだけ大事かということだと思う。

### 【具体的な施策・取組の提案】

- 地域人材バンク、マッチングサービス
  - ・ 前回、地域の人材バンクの提案が出たが、私も公募申込の際に「教育のマッチングサービスシステムをつくる」といったことを提案し、同じような趣旨ととらえた。多様な方々が、現場で理解しあい、問題を抱えている方々にも寄り添っていけるような意味で、良いご提案と思った。
  - ・ 「マッチングサービス」については、強制ではなく、やりたい人同士を結び付けられるものと思っている。楽しければ参加するし辛ければ参加しない。自分から自発的に発言し実行できる場所がないといけないのでは。
- 「学校を地域の学びのプラットフォームに」

- ・ 前回出た、学校で地域の色々な人々が学べて仕事にも結び付くような仕組みができると、良い循環ができると感じた。
- 地域との窓口となる児童・生徒組織
  - ・ 学級委員などの委員の一つとして、地域の方との窓口になるような委員があると、地域の方たちにも子どもたちの意見を汲み取ってもらいやすくなるのでは。地域の時間のあるような人たちの学校内での居場所のようなものを設けて、そこに委員がいろいろ相談に行けるようにするなど、目に見えるような形のものでできると、地域ともつながりやすくなるのではないか。
- 地域につながっていない人の巻き込み方策
  - ・ 今、在宅勤務をする社会人や遠隔学習を受けている学生が増えており、昼間の大人人口が増えている。そういう昼間に自宅に籠っている人たちがサテライトオフィスやコワーキングカフェなどでも良いが、何か地元でつながれる、巻き込める施策があると良いかと思う。それが子どもにもつながれば。従来のPTAやおやじの会、CSといった枠組みを超えた、地域につながっていない人たちを巻き込む施策を、在宅勤務や遠隔学習の増加といった観点から、作れないか。
- 社会教育主事、社会教育士の活用
  - ・ 社会教育主事という国家資格があったが、今年から社会教育士という称号が出来て、専門職として地域の中でいろんな活動をできるよう位置づけが変わってきた。学びのオーガナイザーとしてもっとそうした人たちを育成し、配置していけないか。上から指導的に組織するのではなく、自分も当事者になり一緒になって楽しみながら巻き込んでいき、対話という関係の中で住民の方の様々な気持ちを引き出していく、そうした仕掛けを作る人として育成できないか
- 「祭り」の復活、創設
  - ・ 祭りがどんどんなくなっていて、祭りをもう一度地域に復活させていく、それがなければ新しい祭りを作っていく。そういう非日常的なものが地域のつながりのきっかけになるのではないか。
- 「子ども会」（地域における子どもの組織）
  - ・ 自然発生的に「子ども会」のようなものが出来て、そこに地域の大人が入ってざっくばらんに子ども達が喋れて居心地のいい場所となり、先ほど出たお祭りのようなものを、子どもたちが自発的に自然発生的にやってみたいことがかなえられる場所が学校以外にも出来れば、学校では取り残されてしまった子どもたちが主役となって輝ける場所にもなるのではないか。ただ、強制的に作ってしまうと、やらなければならないということになってしまうので、自然発生的に出来るかが大切である。
- 弁護士（ボランティア）の活用
  - ・ 「子どもの権利条約」を子ども自身が知らないことが多い。ある区の実組で、児童館の中に弁護士がボランティアで居て、憲法であなた達の権利はこのように保障されている、といったことを分かりやすく伝えているらしい。声に出せない子どもたち、家庭や親御さんの問題で苦しんでいる子どもたちを、そこで救ってあげているという話を聞いている。杉並区でもそういう取組ができると良いのでは。

以 上